庭師PR 伝統の作業着 半纏着て走る！

尾崎さんら 12日彦根シティマラソン

十二日の「彦根シティマラソン」（彦根市や市教委など主催、中日新聞社共催）に、庭師の伝統的な作業着である半纏（はんてん）（法被）を着て参加する若手職人たちがいる。法被は、彦根総合高校の生徒のお手製。職人の一人は「会心の出来。あまり知られていない庭師という職業をPRしたい」と意気込む。（山村俊輔）

職人は、彦根市野瀬町の尾崎塁さん（四〇）、同市上岡部町の大西浩充さん（四一）、同市大堀町の見津誠さん（四〇）、愛荘町軽野の伊関靖幸さん（三四）の四人。いずれも、庭師の技術向上や情報共有、PR活動などに取り組むNPO法人「いろは組」のメンバーだ。

同マラソンに何度も出場してきた尾崎さんが、法被姿で走ることで庭師のことを知ってもらおうと提案。オリジナルの法被の制作を、NPOの仲間を介して、同高校のクラフト部に依頼した。

制作したのは、同部の部長、林颯太さん（一七）をはじめ、田中舞さん（一八）、松本結衣さん（一八）、中川誠斗さん（一八）、中川貴子さん（一八）の五人。

尾崎さんらが大まかなデザインを伝え、あとは生徒らに一任。生徒は卒業作品の一環として、一カ月ほどで四着を完成させた。走りやすさを追求し、生地は薄手の黒色。背中の部分に、大きく白地で付けられた「園」の文字が印象的だ。

デザインは、市内の名勝「玄宮楽々園」の庭師が十年前に着ていた法被を市の許可を得てまねた。「園」の字は、彦根市長だった故・井伊直愛さんの夫人で、旧琉球王家出身の故・文子さんによる書体。

「責任の大きな仕事。良い物を作ろうと取り組んだ」と話すのは部長の林さん。「庭師の人に会うのは初めてだった。文字の配置を決めるのに苦労した」とも。

出来た法被について「手作り感があって、仕事でも使えそう」と尾崎さん。「庭師という仕事は知っていても、どんな人たちなのかはイメージしにくいと思う。マラソンで目印となる半纏を見かけたら、ぜひ声を掛けてほしい」と話している。

彦根総合高生のお手製↖

上 背中の部分に「園」の文字をあしらった特製の半纏（法被）を着てマラソンに臨むメンバー。右から2人目が尾崎さん＝彦根市内で　下 半纏を手掛けたクラフト部の部員たち。後列左端が林部長＝彦根市の彦根総合高で

びわこ版

家のふとんの中です。ふとんの中にいると気持ちがおちつきます。いやなことがあっても、ふとんがなぐさめてくれるのですきな場所です。ねるのもすきなことです。

愛荘町秦荘西小4年　西沢　幸生君

アイスポット

八幡山ロープウェー